

# 下駄スケート発祥の地 下諏訪

下諏訪町スポーツ推進委員

松沢

好哲よしのり



スケートが日本に伝わった明治時代、庶民の間では革製のスケート靴よりも木製の下駄にスケートの刃を取り付けた下駄スケートが親しまれていました。

下駄スケートが下諏訪発祥というのを知っている人は多いかもしれませんが、下駄スケートがなぜ下諏訪発祥といわれているのかをご存知ですか？

## 普及していく下駄スケート

スケートが普及していったひとつの要因として、諏訪地方の特産である鍛冶屋の技術があります。明治三十九年に諏訪中学生が下諏訪の鍛冶屋カネヤマに

下駄スケートの製造を依頼し、この下駄スケートが安価で作れるとあって下駄スケートは大流行していきます。当時革製のスケート靴は非常に高価だったため、それに比べて十分の一段の値段で手に入れる事ができる下駄スケートが人気を得ました。



なつかしい下駄スケート

明治三十九年には中央東線が東京から岡谷まで開通し、東京から学生やスケート愛好家が訪れるようになり、爆発的にスケート熱は盛り上がりつついきます。また、明治四十四年には中央西線も接続し、諏訪は東京・名古屋と一本の鉄道で結ばれることになり、積極的

にスケート客の誘致を図りました。

## 競技会の開催とそれを支える人々

それを支える人々

明治三十九年以降、諏訪湖水会（こおりすべるかい）やスケート会等の団体が発足し、氷滑大会や諏訪湖一周氷滑競走大会等が開催され人気を得ます。明治四十二年の諏訪湖一周氷滑競走大会は参加者が多く、約二百名の参加者を五十名程に絞る予選会が行われた程の人気ぶりでした。諏訪地方では全国規模の大会が数多く開催され、こうした大会には東京などの各新聞社が取材に訪れ「諏訪のスケート」を全国に広めるきっかけになりました。

また、秋宮リンクでは大正十一年に日本で初めての本格的なフィギュアスケート競技会が開催、大正十三年には日本で初めてアイスホッケーの公式試合が開催、昭和十二年には日本で初めてのカーリング競技が開催され、秋宮リンクはフィギュアスケート発祥の地、カーリング発

祥の地とも呼ばれています。まさに諏訪地方はスケートの中心地であったことを知る事が出来ます。

下諏訪が下駄スケート発祥の地と言われ、諏訪地方でこんなにもスケートが発達した理由は、①諏訪湖や秋宮リンク等の良質な湖水があったこと②諏訪の特産である鍛冶屋により安価な下駄スケートが制作出来たこと③中央東線・西線の開通により大都市からのスケート客の誘致に成功したこと④スケート競技会等の大規模な大会を開催する組織づくりがおこなわれたこと、そして⑤諏訪の人は寒さに負けずスケートが大好きだったことがあげられると思います。

こうして下駄スケートは、下諏訪から広まっていきました。そんな下諏訪の文化を大事にしていきたいですね。

諏訪湖博物館入り口付近にあります



## まゆだま 蒟玉づくりを通して 伝統と温かな愛情と技を学ぶ

～高齢者の方々と若いお母さんたちとの交流～

### 子育てふれあいセンター



はじめにほけった一さんから蒟玉の由来を、中村センター長からは仕事の手順をお聞きします。



ほけった一さんの熟練の技。ねられた米の粉を茹でたあと、食紅で色をつけます。



わたしに孫ができました！お母さんが大変そう…。私がお母さんを見てあげよう。



お母さんといっしょにおだんごにまるめ、いろいろな形にします。ちょっと食べちゃおうかな！

昔からの、子どもの無病息災、五穀豊穡を願って行う「蒟玉づくり」。お年寄りがないお家でも、ここへ来ればお母さんのお母さんみたいな「ほけった一さん」たちに教えていただけます。若い母親方は伝統の行事や技を教えてもらい、ほけった一さんたちは若い親子から元気をもらうのだそうです。子育てふれあいセンターでは毎月、このような人生や子育ての先輩方に教えていただきながら、交流できる催しがあります。

問い合わせ先：子育てふれあいセンター ☎27-5244

## INTERVIEW

趣味であるスノーボードを思い切り楽しめる二月。下諏訪での生活を始めて二年が経とうとしている。

住む前から、諏訪湖や八島などの豊かな自然、御柱やお舟祭といった伝統文化溢れる行事、温泉や諏訪大社などの観光資源など、たくさんの魅力がある町だということは知っていたが、日々生活する中でそれ以外にもたくさんの魅力があることに気づかされる。先日、町内の高校に立ち寄った際に生徒さんたちから、「こんにちは！」と気持ちのいい挨拶をたくさんいただいていた。以前から、町内小中学生の挨拶が素晴らしいことは身をもって実感していたが、高校生になっても、見知らぬ大人に率先して挨拶をしてくれる姿に接して、とても明るい気持ちになった。

町を見渡してみると、駅前にある大きな町内の観光マップ、町を彩る花壇など、様々な場所で子どもたちの下諏訪町をよりよくしたいという願いが、町に活力を与えている。私もこの町の先輩である子どもたちの姿を見習い、この町に貢献できる人間に成長していかなければと思っています。

(伊藤)

18